

# ドイツ語「羊」の語源について

鹿見嶋 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

2005 年 9 月 15 日 受理

- 要約 1. 印欧祖語（以下：idg.）を遡って現代ドイツ語（nhd.）Schaf「羊」に対応する単語は不明である。
2. ゴート語（got.）skatts は「財産、お金」ではなく、「通貨名称」である。
3. 「羊」の語源はラテン語（lat.）caput「頭」「動物の頭（匹、尾、羽）」である。

## 1. 語源辞書の記述

nhd.、現代英語（ne）の語源辞書で、Schaf, sheep「羊」は同系統の単語なし、と記述されている。

Kluge<sup>(1)</sup>: 「中世高地ドイツ語（mhd.）schâf, 古高地ドイツ語（ahd.）scâf, 古ザクセン語（asächs.）古低地フランケン語（afrank.）scâp, 中世低地ドイツ語（mnd.）schâp, 中世オランダ語（mnl.）scaep, 現代オランダ語 schaap, 古フリースランド語（afries.）skêp, 古英語（ags.）scēap, ne. sheep は、西ゲルマン人が早い時期に羊の飼育を発展させたことを証明している。東ゲルマン人（got. は東ゲルマンに属する西ゴート人のことば）は lamm を用いている。

古北欧語（anord.）fær, スウェーデン語（schwed.）får, デンマーク語（dän.）faar はゲルマン祖語・想定形（\*）fahaz, idg.\*pokos「羊毛をもつ動物」、ギリシア語（gr.）πόκος「刈り取った羊毛」、母音交替によるπέκος「毛のついた羊皮」は idg.\*oûis に遡る、この単語は nhd. Aue「母羊」に保たれている」

西ゲルマン語は、nhd. ne. nnl. で、東ゲルマン語は 4 C 中葉、ウルフィラ（AD311 頃～383）が翻訳した旧約・新約聖書の断片が残されている got. は「羊」を nhd. Lamm「子羊」にあたる lamb を「羊」一般の名称として用いている。

「羊」一般をあらわす単語は、idg.\*oûis「母羊」、gr. οἷς（男性/女性 散文では πρόβατον の方が優先された<sup>(2)</sup>）、lat. ovis（女性）である。got. では lat. からの借用形として awistr「羊小屋」という単語が現れる。

ヨハネによる福音書（J.）10, 16 got. jah anþara lamba aih þoei ni sind þis awistris. . .

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる」

gr. και ἄλλα πρόβατα ἔχω, ἃ οὐκ ἐστὶν ἐκ τῆς ἀύλης ταύτης

---

Shigeo Kagoshima; Department of Law, Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aobaku, Yokohama 225-8502

got. awistr は lat. ovis に -tr (nhd.Stall「厩舎」)を加えた got. の造語で ahd. にも lat. ovile (<ovis)「羊、山羊小屋」を借用した euuist がある。

Tatian<sup>(9)</sup> 133,13 ahd. Inti anderiu scâf haben, thiū ni sint font thesemo euuist.

lat. Et alias oves habeo, quae non sunt ex hoc ovile,

Duden<sup>(4)</sup> :「・・西ゲルマン語の Schaf の語源は解明されていない。」

Oxford<sup>(5)</sup> :「・・同語族の語源は知られていない。」

西ゲルマン語で、Schaf,sheep,schaap と同定できる最古の形態がでてくるのは、5 C の ags.<sup>(6)</sup> scēap, scāp, scēp, scīp である。nhd. と直接対応するのは ahd.(8C)Tatian にでてくる scâf である。謎は、idg. とはまったく系統の違う単語がゲルマン語で「羊」をあらわす単語としてでてくることにある。

羊	サンスクリット語 (sansk.)	gr.	lat.	got.	ags.	ahd.	リトアニア語 lit.
	âvih	oiş	ovis	?	scāp	scâf	avis

バルト・スラブ語であるリトアニア語は、sansk. に遡る古い語形を保存している。got.ahd. は、lat. から借用した「羊小屋」awistr,euuist を保存しているが、動物名としての羊は異なった単語を用いている。got. では nhd.Lamm 「子羊」に遡る lamb を用いる。

子羊	gr.	lat.	got.	ags.	ahd.
	ἀρνῦν	agnus	lamb	lamb	lamb

got. は「羊」一般にも、「子羊」にも用いている。

この語源不明な単語 nhd.Schaf は、got. の中にその源流を見出さなくてはならない。また、その痕跡が現代語のどのような単語にあらわれるのか、を見ていこう。

## 2. 牧畜用語か、商業用語か？

### (1) 牧畜用語から商業用語へ

シュラーダー『インド・ヨーロッパ語族』<sup>(7)</sup>によると、「[羊]をあらわす単語は idg. の言語において一致している」という、しかし nhd.Schaf 「羊」の語源にはふれていない。

『ガリア戦記』<sup>(8)</sup> 6, 21 lat. renophoreus は pellibus aut parvis rhenonum tegimentis utentur(i.e. rhenonibus quae sunt parve tegimenta)「小さなおい(衣服)である毛皮」とある reno は「毛皮を着た」の reno- であり、sansk.urana「雄羊、子羊」gr. ἀρνῦν「子羊」と結びつく。

- ・「羊毛」 nhd.Wolle は、got. wlla,sansk.urana ,gr. ῥννος ,lat. lana ,lit. vilna
- ・「織る」 nhd.weben は、ahd. wēban(weban,weben) gr. ῥφαινω ,sansk.urana-vabhih「蜘蛛(原義：羊毛を織る女)」<sup>(9)</sup>
- ・「家畜」 nhd.Vieh は、sansk.pasuh, lat. pecus 「羊、家畜の群れ」 pecū 「羊の群れ」

・「羊毛」: gr. πεκος 「毛を刈る」 gr. πεκω 「毛を刈る」, lat. pecto 「毛を梳く」

sanskrt.gr.lat. からゲルマン語を分ける第一次子音推移に従えば、sanskrt.gr.lat.: -p- → ゲルマン語 -f- となる。また idg. -e- は sanskt.-as- は、-h- の前で got. は、-ai- となるので、gr. πεκ- は、got. faih 「家畜」に変わる<sup>(10)</sup>。ただし、got. faih は「財産」の意味である。

マルコによる福音書 (Mc.) 14,11

got. īb eis gahausjandans faginodedun jah gahaihaitu imma faihu giban ;

「かれらはそれを聞いて喜び、金を与えることを約束した」

nhd. Da sie das hörten, wurden sie froh und verhiessen, ihm Geld zu geben.

gr.: οἱ δὲ ἀκούσαντες ἐχάρησαν καὶ ἐπηγγέλαντο αὐτῷ ἀργυρίον 「銀」 δοῦναι.

lat.: Qui audientes gavisi sunt : et promiserunt ei pecuniam se daturus.

従来「貨幣」をあらわすと考えられている got. は skatts である。Kluge<sup>(11)</sup> は nhd.Schatz 「財宝、豊かな貯え」の項で、got.skatts との関連をつぎのように述べている。

「got.skatts 「貨幣」、ahd.skaz 「貨幣、財産」、古ザクセン語 (asächs.) scat 「貨幣、所有物、家畜」、mnl.scatt(t), nnl.schat, afries.skett 「財宝、貨幣、家畜」、ags. sceatt, 古アイスランド語 (aisl.) skattr 「譲渡、豊富、貨幣」」

クルーゲはさらにこれらの単語から s - を取り除いた kattr を ne.cattle 「牛、家畜」を強引に結びつけている。lat.pecus 「牛、家畜」と関連によって「家畜」→「財産、貨幣」への意味の変遷を意図している。この意図の背景には「ゲルマーニア」<sup>(12)</sup>の記述の影響が意識の底にある。「彼らの喜ぶところはそれら（牛）の数であって、牛たちが彼らにおける唯一にして最も貴重とする財産である。」

シュラーダーも、「家畜」→「財産、貨幣」を踏襲している。

「[lat. pecus から派生した pecunia(pecus+nia 縮小語尾)「貨幣」は、この語の確実に古い派生語であり、ウルフィラも、gr. ἀργύριον 「貨幣」を訳すために、got.faihu = Vieh を選んでいる。しかしこの語はもう一方では語源的に gr. πεκος 「刈り取ったままの羊毛」 lat.pecto 「毛を梳く」などに関係する。したがって「家畜」は、もとは「羊」をあらわす語が特別な意味をもったものだろうということが、わかる。しかし、その語は、印欧語族の所有する主な家畜がまだ羊からなっていて、後の時代ほど牛がまだ大きく前面にあらわれていなかったときに、はやくもそうした一般的な意味をとるにいたったのであろう。」

ゴート人の飼育している家畜が、羊から牛へ移行したという言語外の事実の証明はまったくない。著者のたんなる想像にすぎない。gr. πεκοςにあたるゲルマン語の中で音韻的に対応する faihu があたかも「羊」の語源で、その後、指示する対象が「家畜」に変わった、と強引に説明するための方便である。nhd.Schaf に直結する単語が got. のどの単語なのか、あるいは存在しないのか、という肝心な部分は不明のままである。

ちなみに、got.faihu に関して、シュトロウの説も紹介しよう<sup>(13)</sup>。

indg.\*peku- 「羊毛をとる動物、羊」から派生した got.faihu には① Vieh 「家畜」② ahd.fehtan 「争う」であるという。語根 feh に付く語幹形成子音 -t- がどんな意味なのか説明していない。got.-ai- は [e] なので、音韻的には可能性は皆無ではない。しかし -t- の説明がないので、この説は語源から除外すべきだ。

① Vieh は、シュラーダーと同じように lat. pecus「家畜」→ lat. pecunia「貨幣」の意味の変遷は indg.\*fehu- であって、got. faihu「貨幣、財産」の意味は、「家畜」から始まると考えている。

(2) 商業用語から牧畜用語へ

「家畜」から「貨幣、財産」への意味の変遷を考えているクルーゲ、シュラーダー、シュトローとまったく逆の変遷—「貨幣、財産」から「家畜」—が生まれてきたと考えているのはバンヴェニストである<sup>(14)</sup>。

「羊」をあらわす gr. *προβαίνειν* (不定詞) は「先頭を歩く」の意味ではない」という。

「羊」をあらわす gr. は *οἷς* であるが、Oxford の辞書<sup>(15)</sup>によると、「散文では *προβαίνειν* から派生した *προβατον* を優先する」。聖書でも *οἷς* ではなく *προβατον* を用いている。

マタイによる福音書 (Mt.) 9,26

got. *gasaihvands þan þos manageins infeinoda in ize, unte wesun afdauðai jah frawaurpanai swe lambe ni habadona hairdeis.*

「また (イエス) は群衆が飼主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」

gr. *ἰδὼν δὲ τὸνς ὄχλους ἐσπλαγχνίσθη περὶ αὐτῶν, ὅτι ἦσαν ἐσκυλμένοι καὶ ἐρριμμένοι οἱ ὡσεὶ πρόβατα (複数) μὴ ἔχοντα ποιμένα.*

nhd. und da er das Volk sah, jammerte ihm daselbe; denn sie waren verschmachtet und zerstreut wie die Schafe, die keinen Hirten haben.

同じ Mt.9,26 で、lat. は *oves*(*ovis* の複数形)、aisl. は、*sauðr* を「羊」一般に用いている。aisl. 辞書の編者クレスピーは<sup>(16)</sup>、「ウルフィラは got. *saups*=*θυσις*「いけにえ」は、aisl. の *sjóda*「料理する」*seyðir*「料理する火」と関係のあることばだと考えた」と述べている。aisl. が大陸・英国と異なった単語を使うこと、に対する説明だが、この違いは地理的・歴史的な言語外の実実に由来するのであって、言語内の問題ではない。このことは 3. で説明する。

素直に文献本文の文脈を読めば、got. *faihu* は、lat. *pecus*「家畜」の意味ではない。「貨幣・財産」の意味である。got. *faihu* から派生する単語はいずれも金銭に関する用語である。

*faihu-freikei*「所有欲」*faihu-friks*「けちな」*faihu-gairnei*「所有欲」*faihu-gairns*「けちな」*faihu-waurki*「金銭を得ること」

gr. *πλεονεκτεῖν*「他人よりも有利なこと」にあたる got. *gafaihon, bifaihon*「だます」がある。この動詞から got. *bifaih*=gr. *πλεονεξία*「peten」という名詞が派生する。

コリント信徒への第二の手紙 (Kor.) 9,5

got. *naudipaurft nu man bidjan broþruns, ei galeipaina du izwis jah fauragamanwjaina þ ana fauragahaitanan aiwlaugina izwarana, þana manwjana wisan swaswe wailaqqiss jah ni swaswe bifaihon* (gr. *πλεονεξίαν < πλεονεξία* 4 格)

「そこで、この兄弟たちに頼んで一足先にそちらに行って、以前あなたがたが約束した贈り物の用意をしてもらうことが必要だと思いました。渋りながらではなく、惜しまず差し出したものとして用意してもらうためです。」nhd. nicht des Geizes

「誰より優る犠牲を払って自己を高める、利用する」ことなく (ni = nicht) の意味で「誰よりも豊かになる」gr. *πλεονεξία* を翻訳している。

got.faihon は faihu の名詞派生語であり、-u 語幹の名詞から派生した。

(例) sidus「風習」(nhd. Sitte) → sidon「行う」

lustus「・・・する気」(nhd.Lust) → luston「渴望する」

aisl. の「家畜、貨幣」をあらわす単語は fé である。

・gangandi fé「歩く富」は gr.  $\pi\rho\acute{o}\beta a \sigma \iota \varsigma$ ,  $\pi\rho\acute{o}\beta a \tau o \nu$  の直訳で「家畜」をあらわす。

・félagi「同僚、仲間」(ags.féolaga, ne.fellow「仲間、パートナー」)の派生語 félag「共有物」は「家畜の群れ」の意味ではなく「財産、富」である。

・名詞派生動詞 féra は「自己を豊かにする」つまり「富 fé を得る」を意味する。ここから fénaðr「富」が派生する。

以上、ゲルマン語では、「家畜」→「富」という idg. の発展とは逆の進路をとっている。牧畜から貨幣経済への自然な移行が、ゲルマン人の場合、ローマ帝国に侵入したことにより貨幣経済の用語が牧畜の用語として定着していったことが窺える。

### 3. 「羊」の語源

現代語「羊」に直接遡る単語が got. において発見できないことは、語源学にとって、基礎的な語彙の解明がなされていないという点において重要な意味をもつ。2 で見たように、「家畜」をあらわす語彙が「財産、貨幣」をあらわす意味に変わっていったのではなく、ゲルマン語では、「財産、貨幣」が「家畜」をあらわす単語にかわっていった、という指摘は、「羊」の語源を考える上で大きな前提となる。

nhd. Schaf, ne. sheep に直接むすびつく単語は got. にはない。しかし、その萌芽は got. sik skaftjan にある。弱変化・再帰動詞で、gr.  $\mu\acute{\epsilon}\lambda\lambda\epsilon\iota\nu$  の現在分詞・男性・1 格  $\mu\acute{\epsilon}\lambda\lambda\omega\nu$  「～するつもり」の訳語として got. 約聖書に一箇所だけでてくる。版によってドイツ語の訳語はことなる。

シュトライトベルク版<sup>(17)</sup>では sich anschicken「～の用意をする」、シュタム版<sup>(18)</sup>では in Bereitschaft setzen, sich anschicken, sich bereit machen「～するつもり」と訳している。J.12,4 qap þan ains þize siponje is, Judas Seimonis sa Iskariotes, ize skaftid (skaftjan の過去) sik du galewjan ina.

「弟子の一人で、後に裏切るイスカリオテのユダが言った。」

gr. λέγει οὖν εἰς ἐκ τῶν μαθητῶν αὐτοῦ, Ἰούδας Σίμωνος ὁ Ἰσκαριώτης ὁ μέλλων αὐτόν παραδιδόναι.

nhd. Da sprach seiner Jünger einer, Judas Ischarioth, der ihn hernach verriet.

日本語、nhd 訳では、訳されていない。シュトライトベルクとシュタムは単純に、gr. の訳語として“der breit machende”を考えている。しかし、この sik skaftjan は「自分を売る」そして「彼（イエス）を」ina「裏切る」galewjan+du(nhd.zu)と訳すべきである。この nhd. Schaf, ahd. scāf と形態的に類似した got.skaft- とは何であろうか？

研究社の『英和大辞典』では、通貨ドルをあらわす単語として buck を挙げている。本来は「ト

ナカイ、レイヨウ、ウサギ、羊、山羊、ネズミなどの雄」。派生した意味として、通貨ドルの意味がある。これは「米インディアンとの交換の単位として用いられた」とある。貨幣を持たない民族が貨幣経済に移行する糸口は、貨幣と交換する対象としての家畜であつたろうと想像される。ローマ帝国内に居住していた西ゴート人とローマ人との貨幣経済の発端も、おそらく米国人とインディアンと同じような取引があつたのであろう。

このことは、AD 1C に書かれた『ゲルマーニア』 5. ゲルマーニアの地貌・経済において貨幣経済が広がる有様が書かれている。

「しかし、われわれ（ローマ人）にもっとも近く住んでいるものたち（ゲルマン人）は、商取引をいとなむ結果、金銀の価値をわきまえ、われわれの貨幣のいくつかの種類を知っているのみならず、選んでこれを受け取る・・・内奥に住むものたちは・・・物々交換を行っている。その貨幣は古くから行われて永く目に触れているもの、たとえばセッラートゥスカビガートゥスとかを尚ぶ。」

『ゲルマーニア』から約 200 年後の AD 4C の got. 訳聖書の時代には、貨幣経済が西ゴート族の中にいきわっていったことは、*faihu-friks*「食欲な（金を欲しがる）」*faih-gairnei*「食欲（金を欲しがること）」という単語によって知らされる。『ゲルマーニア』の「彼らは、金銀の所有と使用に対して、それほど執着さをもっていない」というかつての素朴なゲルマン人が 200 年の時を隔てて変貌したことが窺える。

タキトゥスが『ゲルマーニア』で挙げているセッラートゥス (*Serratus*) は *Der kleine Pauly*<sup>(19)</sup> によると「BC 140～113 または 211～08 に流通していた銀貨、特に 120 年代は大量に流通していた」。タキトゥスが「古くから行われ永く目にしている」とは一時代前の貨幣であり、当時の価値は不明。高額でないことはタキトゥスの記述から推察できる。

パウリーによると、ウルフィラの時代には、コンスタンティヌス I 世（大帝）の発行したソリドゥス金貨 (*solidus*=got. *skilliggs*) が統一金貨として流通していた。BC209～AD215 の 400 年間基準通貨であったデナリウス銀貨 (*denarius*) は、インフレによって、発行時の 1/100 から 1/140 に下落していた。

聖書には通貨の名称がでてくる。新約聖書（成立 AD50～120 年頃）にはイエスの時代の通貨名称 *ἀργύριον, δηνάριον, μνὰ* がある。ウルフィラは、これらすべてを *skatts* を用いて翻訳している、と *aisl.* 辞書で、*kresbīe* は *ails.skattr* の項で述べている。聖書を自国のことばに翻訳する場合、翻訳の時点で流通している通貨名称を使うことは普通ない。*nhd.* でも、*Groschen, Silbergroschen* と一昔前の通貨名称を使う。この同じ方法をウルフィラも使ったと仮定すると、*skatts* は古い通貨名称でなければならない。

事実、ラベンナの聖アナスタシア教会にあったパピルスに記された got. の契約書 (AD551 年) には、*skilliggs* (*nhd.* *Schilling*) という通貨名称が書かれている。これはソリドゥス金貨をゴート人の間で用いられる通貨名称に変えたものである。

ただ一箇所、ローマの通貨名称を使っている箇所がある。それはほとんど価値がなくなった通貨 *kintus* である。これは *lat.* *quadrāns* を借用した単語である。無価値なもの、「びた一文」の「びた」にあたる普通名詞になっていると思われる。

Mt.5,26 got. *amen qīpa þus: ni usgaggis jainoþro, unte usgibis þana minnistan kintu.*

「はっきり言っておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

gr. ἀμὴν λέγω σιο, οὐ μὴ ἐξέλθῃς ἐκειθεν, ‘ε’ ως ἀν ἀποδὼς τὸν ἐσχατον κοδράντην.

lat. Amen dico tibi: non exies inde, donec redas no vissimum quadrantem.

ahd. T. ではこの「クアドランス」を got.skatts を継承する単語 scâz を用いている。

T.27,3 Uúar sagen ih thir : ni ges thú thanane thu giltis then iugisten scâz.

つまり、got.skatts は辞書にあるように「一般なお金」ではなく、「通貨名称」である。「一般なお金」は got.faihu である。

Mc.14,5 maht wesi auk þata balsan frabugjan in managizo þau þrija skatte jah giban unledaim.

「この香油は 300 デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに」

gr. ὀφραπτῶν lat.denariis

T. ではさらに lat.denarius に対して、phending (nhd.Pfennig) という通貨名称もあらわれる。

T.138,12: bihiu ni uurdit thiú salba forcoufit uuidar thriuhund pfennigon inti gígeban thurfígon?

「なぜ、この香油を 300 デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」

lat. denariis nhd. Silbergroschen

では、この got. skatts はどのような由来があるのであろうか。got. の語源辞書<sup>(20)</sup>では不明となっている。その語源は lat. caput 「頭、動物の頭（匹、尾、羽）」である。lat.caput からの借用であると仮定すると got. において語源不明な単語の由来が明確になり、got. の単語が現代語にいたるまでにどのような単語にあらわれ、意味の変化を受けたかが分かる。

ローマ帝国内に侵入・居住していた西ゴート人は、さかんに lat. の単語からの借用によって got. の単語を作った。キリスト教のような文化 (lat. ecclesia → got. afkklesjo 「教会」、貨幣のような文明 (lat. suus 「彼、彼女、彼らの～」→ got. swes 「所有、財産」、lat.arca → got. arka 「金庫」)。その他、日常的な単語も lat. から作られた。lat. caput(got. haubip) から作られたと思われる got. kaupatjan 「びんたを喰らわす」のようなローマ人との密な接触の有様を彷彿とさせる単語もある。

lat. caput から借用されたと想定される単語には kaupatjan を含めて次の 4 つの単語がある。

1. kaupatjan 「びんたを喰らわす」 2. kaupon 「売り買いする」
3. skaftjan 「家畜の群から出す」 4. skatts 「スカッツ (通貨名称)」

#### 1. kaupatjan

lat. caput の -a- を got. kaupatjan の -au- に変える単語: lat.arere 「乾いている、枯れる」に対する got.(ga)þaursnan 「枯れる」がある。よって名詞 caput を got. 風に kaupat- に改め、弱変化動詞の語尾 -jan をつけ、kaupat- (nhd. kaputt 「壊れた、疲れた」) を殴る。

2. kaupon :-a- から -au- への変化は 1. と同じ。語幹形成母音を伴わず lat. caput, got. kaup-

に改め、直接人称語尾つける弱変化動詞。名詞から直接動詞を派生する造語法を使用。

got. salbons「香油」→ salbón「香油を塗る」

ルカによる福音書 (L.) 19,13

athaitands þan taihun skalkans seinans atgaf im taihun daiilos jah qap

duim: kaupob, unte ik qimau.

「そこで彼は、十人の僕をよんで十ムナの金を渡し、『わたしが帰ってくるまで、これで商売しなさい』と言った。」

クルーゲの語源辞書<sup>(21)</sup>では、nhd. kaufen「買う」の語源を lat. caupo「小売商人」に設定している。しかし、これはむしろ逆で、got.kaupon は、lat.caput から創作したゲルマン語ではないだろうか？

「小売商人」という限定的な意味をもつ単語が、「買う」という限定の少ない動詞に転用される可能性は低いのではないだろうか？ nhd.kaufen の語源は got.kaupon「売り買いする」と考える方が自然である。また、kaupon に s- (3.skaftjan で説明) を付けた ags.sceopa「屋台店 (booth=shop)」も got.kaupon から派生したとすると、当時のゴート人の商売がそれほど大規模でなかったことが暗示される。

この単語の流れを汲む現代語は「クーポン」である。

nhd.Kupon, ne. coupon, fr. coupon, sp. cupón, it.coupon

また、ne. cheap「安い」、nhd.Kneipe「飲み屋」もこの単語家族に属する。そして、何よりも、nhd.kaufen「買う」を核とする動詞派生語 23 語 (abkaufen, ankaufen, aufkaufen, auskaufen, bekaufen, einkaufen, erkaufen, freikaufen, loskaufen, nachakufen, uberkaufen, verkaufen, abverkaufen, ausverkaufen, weiterverkaufen, wiederverkaufen, vorkaufen, wiederkaufen, zukaufen, hinzukaufen, zuruckkaufen, zusammenkaufen) をラテン語系の現代語と比較すると、got.kaupon はゲルマン人の発明した基礎語彙と考えざるを得ない。

3. skaftjan: lat. caput の -p- と got. skaftjan の -f- の交替は、idg. からゲルマン語を区別する第一次子音推移によって説明できる。

lat. piscis → got. fiskis「魚」, lat. pater → got. fadar「父」

語頭	lat.	got.
	plangere「悲泣する」	flokan「悼む」
	pars「部分」	fera「側」
語中	lupus「狼」	wulfs「狼」
	complere「満たす」	gafullnan「満たす」

got. 語頭の s - は、got. だけでなく indg. 全般にみられる現象で、ヒルトは<sup>(22)</sup> 移動する

S と呼び、「nhd. scheren と gr. ἐκκεῖρω「剃る」を対比させ、この s- は前置詞 eks-「場所から」、「(時)・後ずっと」「(由来・系統を示す)・・から」「(区分を示す)・・から」「(材料・原料について)・・から」、abs「・・から」「・・の近くから」、ads「単位 (構成全体)」「ポンド (重量単位)」が隠れている」と述べている。しかしこの説明は lat. の造語法の説明であって、



got. の場合は lat.ex- と対応する us- の s - 「外へ」が相応しい。

lat.expandere → got. usbraidjan(nhd.ausbreiten)「広げる」

よって、skaftjan は s - 「外へ」kaft(<caput)「家畜（不特定数）頭を」置く、つまり、「家畜を選んで抜く」という意味の動詞である。そして、家畜のなかで「ドル箱」であった「羊」が got. から ags.ahd. にいたる時期に、本来「羊」を意味していた lamb に代わって、「羊」一般をあらわすようになり、lamb は「子羊」という限定的な意味をもつ単語に変わっていったのである。

got. skaftjan と形態の類似した ahd. の動詞 skephen,scephen は別系統の単語である。

よって、got. skaftjan は got. だけにあらわれ、その後、廃語になった。よって、ahd. では「作る、汲む」(nhd. schaffen, schöpfen) だけが現れる。nhd. において、got. skaftjan の痕跡は、名詞・動詞・形容詞の後ろにつける後綴り -schaft に残ってる。次のような意味を単語にあたえる。

- ①抽象名詞：Freundschaft「友情」Wissenschaft「知識、科学」Eigenschaft「個性」
- ②集合名詞：Priesterschaft「僧侶団」Mannschaft「選手団」
- ③状態：Jungfernschaft「処女性」Vaterschaft「父親であること」
- ④場所：Grafschaft「伯爵領」Landschaft「地方」

このうち ahd.skephen nhd.schaffen に由来するのは①であり、②は got. skaftjan の中に隠れている「群れ」だけの意味ではなく、「選抜」の意味もある。語源ではこの二つを混同している。クルーゲは、nhd. Geschäft「店、仕事」の語源を、想定形 got.gaskafts\* に設定している。これは got. skapjan (nhd.schöpfen) ahd. scephen で、nhd. Geschäft には結びつかない。

T.22,6 Iacobum Zebedeon sun inti Iohannem Iacobes bruoder, then scuof(skephen の過去 got. gasatida < gasatjan の過去) hér namon—thaz sie hiezin Boanerges, . .

「ゼバダイの子ヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲスという名前をつけた . .」

T.5,12 . . gimahhu sô scaffaeru( got. inkilbon lat. pregnante) . . .

「 . . 身ごもっていたいいなずけ . . 」

T.87,5 . . . ni queme hera scephen. (nhd.schöpfen)

「 . . ここにくみに来なくてもいいように . . 」

#### 4. skatts 「スカッツ」

skatts と lat.caput の音韻は： s = us- ゲルマン語化した前綴り； - k - = lat. c - ； -a- 同じ； - t - は本来 - f - で、次の - t - (第一次子音推移にとって - t - は b に変化) と同化したのであろう。語尾の - s は、単位をあらわしている。got. には skatts のほかに skilliggs があり、ともに - s で終わっている。この - s は、重量をあらわす lat.âs で、貨幣単位として最初は 1 ポンド銅貨が使われた。現代で貨幣は、表面に書かれた数字で価値が決まる。しかし、その当時は、貨幣価値は重量であった。この lat.âs は現代語でもラテン語系のスペイン・イタリアの通貨：Real, Peseta, Lira の複数形の語尾 -es, - s に残されている。Reales, Pesetas, Liras: Reales「王のアス＝貨幣」

got. skatts は行為者をあらわす接尾辞 -ja をつけた got. skattja 「両替商」という単語もあらわれる。この場合は「貨幣」の意味で、「通貨単位」ではない。つまり、got.skatts には二重の意味、「通貨単位」と「貨幣」があった。

クレスビーが、「ウルフィラは、got. skatts をすべての通貨を訳すのに、使っている」という注釈は、aisl. の skattr が「通貨単位」「貨幣」という具体的な意味ではなく、「貢納」を意味するからである。しかし、この単語を使うゲルマン人が、ローマ帝国の領内にいて、ローマ人との接触があるか、ないかという言語外の事実によって意味内容が相違することは当然である。言語内だけで意味を判断することは危険である。

ローマ帝国の圏外にあった aisl. の skattr が「通貨単位」「貨幣」ではなく、意味がぼやけて「献納」になった理由は地理的な条件によるものと思われる。

エギルのサガ<sup>(23)</sup>70 章：

Hákon konungr hafði sent menn austr á Vermland, tólf saman; hófðu þeir fengit skatt At jarlinum;

「ハーコン王は東のヴェルマランドに総数 12 名の者を送った。彼らは候から献納をうけとった。」

#### 注

- (1) Kluge, F.: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache (Berlin, 1975)
- (2) Liddle, H. G.: Greek-English Lexicon (Oxford 1996)
- (3) Sievers, E.: Tatian (Paderborn 1966)
- (4) Duden: Etymologie (Mannheim 1963)
- (5) Onions, T.: The Oxford Dictionary of English Etymology (Oxford 1996)
- (6) Clark Hall, H. G.: A concise Anglo-Saxon Dictionary (Cambridge 1960)
- (7) Schrader, O.: Die Indogermanen (Heidelberg 1935) (『インド・ヨーロッパ語族』P.17～20 東京 1977)
- (8) Lewis, C. T.: A Latin Dictionary (Oxford 1969)
- (9) 辞書では、a ram, sheep とある。Williams, M. M.: Sanskrit-English Dictionary (Oxford 1922) Ibid: 「臍に羊毛をもつ」とある。
- (10) Krause, W.: Handbuch des Gotischen §61 (München 1968)
- (11) Kluge: ibid
- (12) タキトゥス: 『ゲルマーニア』5 (東京 1979)
- (13) Stroh, F.: Deutsche Wortgeschichte Bd. I s. 24 (Berlin 1943)
- (14) Benveniste, É.: Le vocabulaire des institutions indo-européennes I Economie (『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集 1. 経済・親族・社会』P.31～56 東京 1986)
- (15) Liddle: ibid
- (16) Cleasby, Vigfuson: Icelandic English Dictionary (Oxford 1975) lat. pecunia に対応。fé が pecus に対応するように、として sheep, cattle 「羊、家畜の群れ」の訳語あり。ただし、Baetke の辞書では、Vieh, tote Habe, Gut, Geld 「家畜」「死んだ動産」「財貨」「貨幣」の訳あり。Baetke, W.: Wörterbuch zur altnordischen Prosaliteratur (Darmstadt 1976)
- (17) Streitberg, W.: Die gotische Bibel (Heidelberg 1971) Derselbe: Gotisches Elementarbuch (Heidelberg 1920)
- (18) Stamm, F. L.: Ulfilas (Stuttgart 1872)
- (19) Der kleine Pauly, Bd. 1, 5 (München 1979)
- (20) Holthausen, F.: Gotisches etymologisches Wörterbuch (Heidelberg 1934)
- (21) Kluge: ibid
- (22) Hirt, H.: Handbuch des Urgermanischen Bd. II S. 125 (Heidelberg 1931)
- (23) Íslensk Fornrit II Bd.: Egils saga skallagrímsson (Reykjavík 1955)